如今川玉章文庫 全

頭書女大學並教歌画入

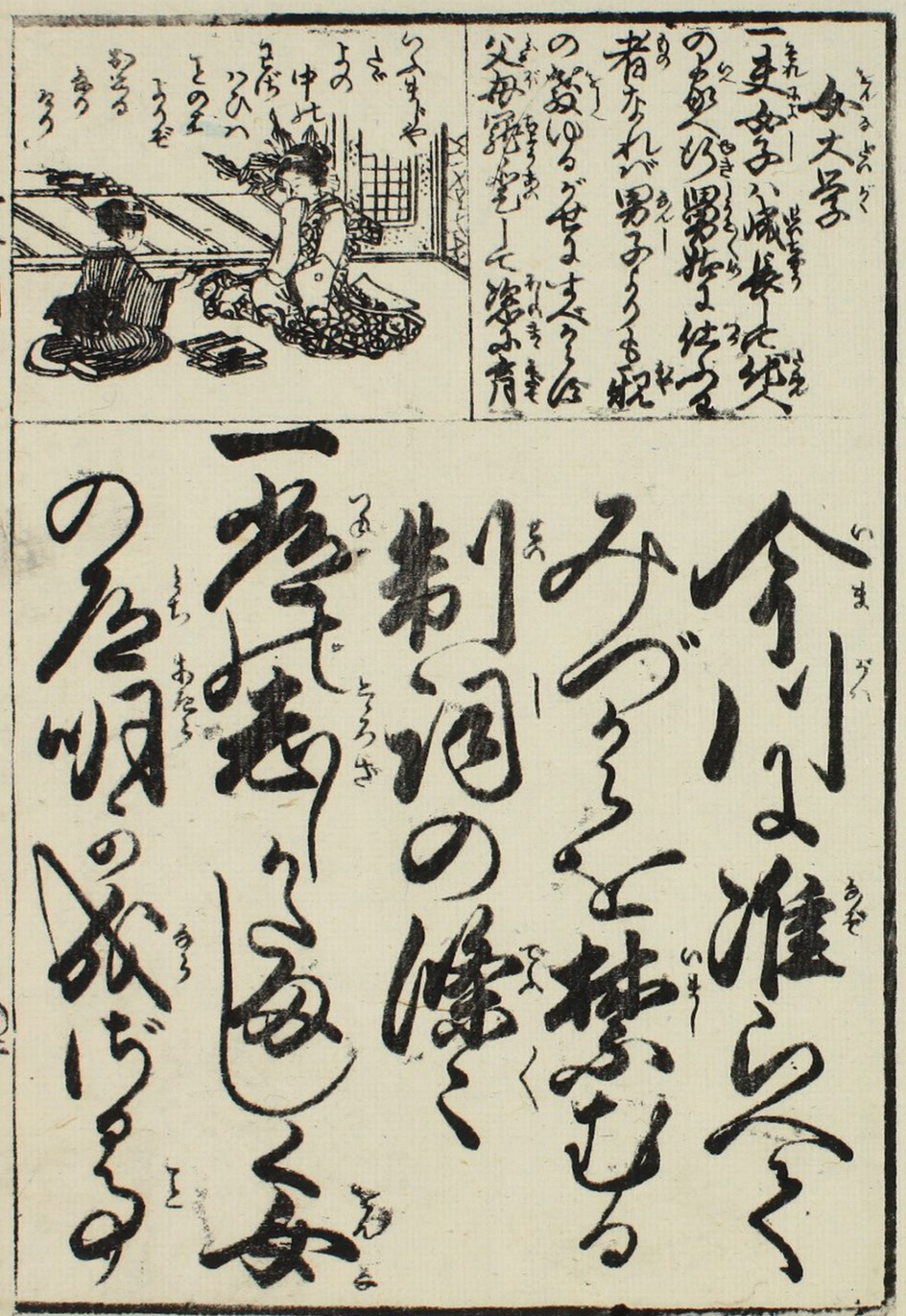
今川状文庫

あまたよび書ものゝ古く作法なく世の
種もまさくに行事なれども書
なるものく侍り行文ふる
ゝ

且かんなの遠へるも撰ばゝ
絲ハ今回あるゝふ改めして
ゝそび梅なよ上るあり

○十姫番付

女今川


一夫女子八歳長ずれば
の男子男子ハ
者なれば男子ハ
の数ゆるがせにすべ
父母寵愛して
今川
制ハ
の
一夫
制ハ
の

ねまたは丈の高ふ切て洗髪
洗ひく丈ふ洗まれ又ハ男
の髪へ油それハ髪がくもりひ
男を恨み怨り中悪くなて
強ふ逆出ちまた和と曝まふ
子の父母我別へるたこと数
云ひして男丈の悪きとのみ
ちふハ強うと見こまる女子の
報の髪へ多き中ふ多り

一和尚女書盛り髪へ
来て楽む事
一如ハ客ようもんの傷ちと
ちとまた仏堂ハ如ハ
仏殿ひく眼ちとく長
して人を恨り強ひうふ

一太事も辨へなく
うもの多人ふ強うり
一父母ふ源氏ハ紙
意れ孝の信源ふ
恨る事

女分門

物云ひがなくに利て人ふ
先ふ人を恨み嫉みひ
多ふ強う人を強う奪ひ
人ふ強り奥多るハ若女の
乃ふ遠ひるこ如ハ呉和
ぎ順ひく貞ひふ情ひう
く辨るとこ云ひう
一女子ハ推き附ふ男女の
別を心くして仮初ふ戯
れるとこ成思関ひ
古の礼ふ男女ハ席を同く
せ衣裳を同ふ
走同下而そ浴せ物を文

とう渡世をもくまうる道を
みせび夜ひる財ハの他を
ちくわび他人のうの及ぶ
支拵ハ茅ぶを別をハ
くすべと之今財の氏都
ハ氏相の法を初ぶて
義を擇めて名を汚し祝
兄弟みを辱をハの又一生
仏をいらずらみする者
に拵ねとうにあとをや女ハ
父母の命と擇拵とふ相
ざれば男み交らを擇
をとふ学ぶを又人とう

一史を拵ひ我と三
て夫婦道と言ふ
一道ひ背さてを業
ゆる者我うを
拵ひ

たとひ命を失ふとも
今名ぶとくみ業くしく
義をもうえ
一婦人ハ夫の命を我命と
する都よ嫁うてハ姑を
とふ人我命ようるとふ

一平生ひうく妻ふる
人を拵もうふ
一相ひよ長ひ或ハ
改を業ぶ或ハ
すさ好む事

一極悪あらく嫉妬の心深く人を恨み

一女は嫉妬の業ハ万事に秘ぢるもの

一人中に云て全人の悪

一家を盛り貴賤共に賤しく法

縁を結ぶの家業なり夫を怨むべき理なし夫より我ふたりあるを恥辱とおもふ故に我が妻きらい我仕合のあしきとおもひ一度婦人を出ざるを女の名とすること古聖人の教なり若女の名を出さるを附ハ一生の恥にされば婦人より七去とて悪名と七ツあり一ハ嫉妬ハ順ハざる女ハ去べし

二ハ子なきを女ハ去べし

三ハ淫乱なれば去べし

四ハ盗ミ癖ハ去べし

五ハ悪病ハ去べし

六ハ口ハ去べし

七ハ物を盗むハ去べし

右七去ハ皆聖人の教

女ハ一回物しるべ

ぶしく行義よくして物しるべ

去むとても同性の子ハ養ハ

べし我ハ幸ハ子なくハ幸ハ

子なくて去ハ及ばぬ去ハ

淫乱なれば去ハ悪病ハ

涙されば去ハ嫉妬ハ

の悪ハ去ハ口ハ去ハ

云ハ物を盗ハ去ハ

ハ病ハ左中悪くなり

家乱るゝの名ハ去

七ハ物を盗むハ

右七去ハ皆聖人の教

女ハ一回物しるべ

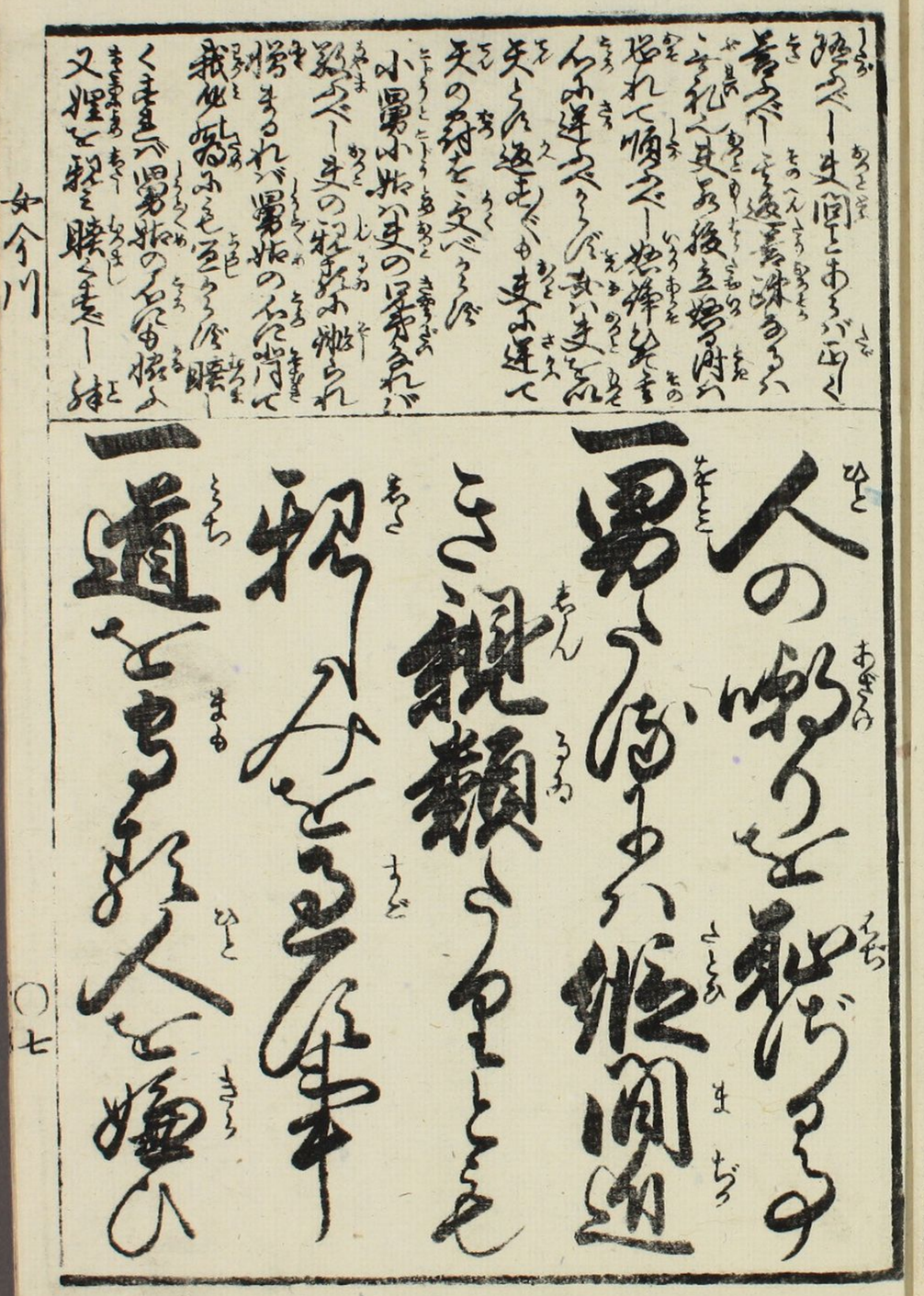
されば紙ふくべ富士の
女ふ指さす女の名ふ遠
大きう和ふ
一女ふ我家におりて
我父母ふ孝をいろふ
ひと給ども女の家ふ
てゐ男指を我親ろ
ゐ幸んとて厚く恩を感
ひ孝ろを盡さゝ牧の
方を幸ん男の方を牧
ずるとき男指の方
夕の見まひを問べ
ら男指の方の親む

一人の親を無ぶ紀
酒を好む事
智あるとき
一生家ふつ不財

べき業を表ろべ
男指の家ふ指ふ
ふく背くべ男と
男指ふ関を強ふ
べ男指ふ我を恨み
ゐ人を怨ろ恨むる

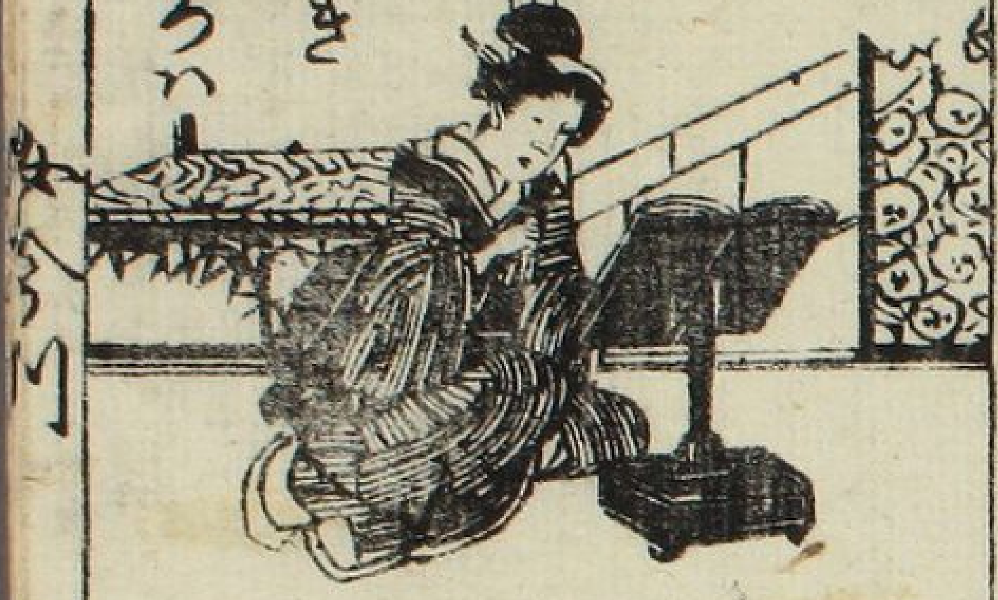
如今ハ

手ふ
迫く
一我
下人


男の姿に暴来りぬ
人の噂を聞くにつけ
一途に思ひ詰めし池
男の姿に暴来りぬ
人の噂を聞くにつけ
一途に思ひ詰めし池

夫の兄嫂ハ夫のごとく敬ひ
舅姑兄姉とおなじくすべし
一 嫉妬の心深く数多の
男の機嫌あらバ深く慎べし
何事も冷にして却て夫の
また是を慎むべき夫の義
夫あらバ我を和らげ
和らかに慎べし
婦ハ先夫ニ和らげ
又慎べし
妻を以て夫ニ逆ひ
一 嫉妬を慎みて

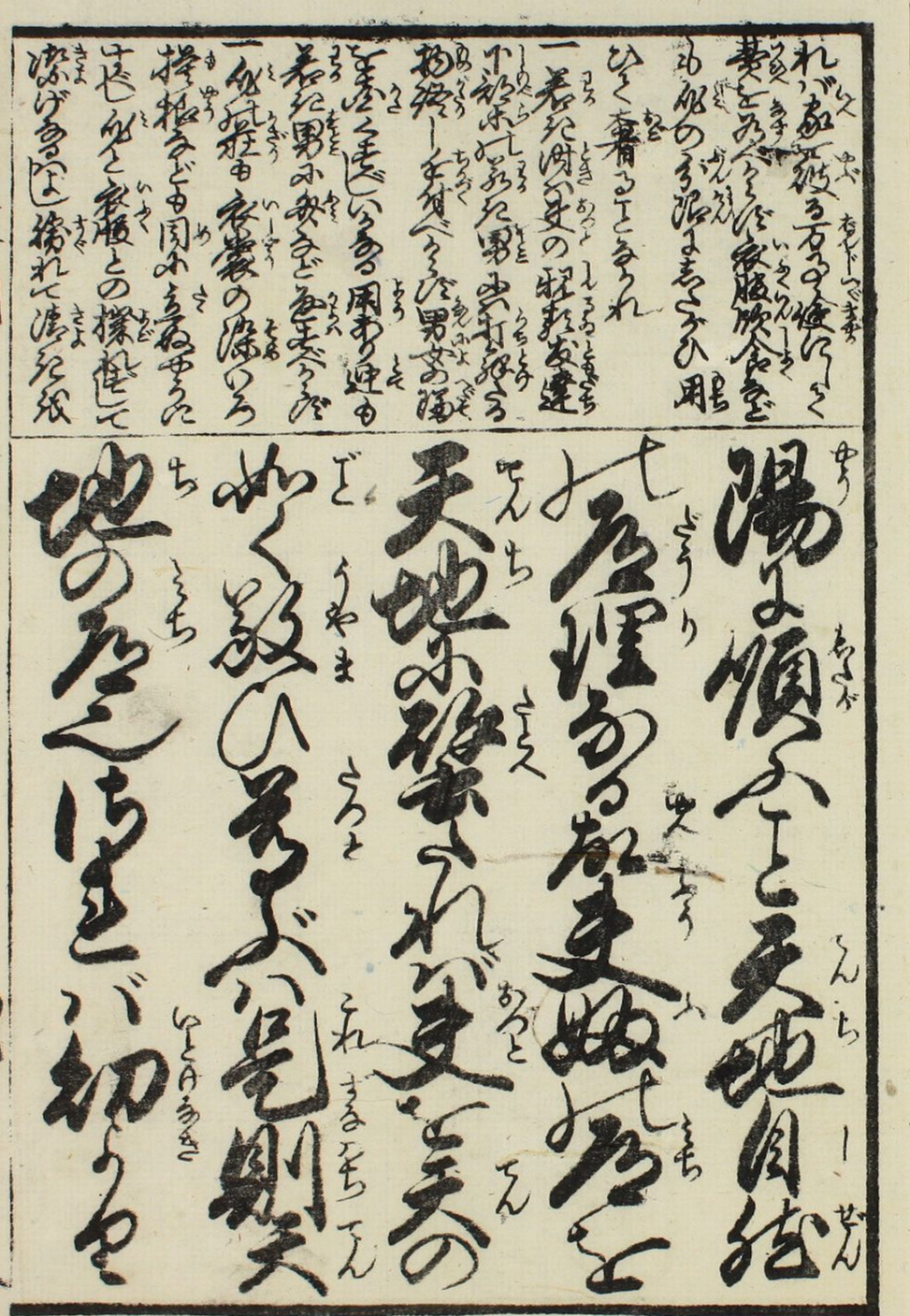
我ハ無つら夫を
侮すてゝ
一 人の衣類を我不織
婦よ縫世色を好む
無体の事



彼にも人を織縫させ
人の縫をとりて
一 女ハ
條々を慎みて

右此條々常に心に
受らるべき事一と
かゝげ候との 給て
情をもつべきまことに先祖
なるべし 志し

一巫覡などのことに逢ひて神仏
を祭り祈るの初めよく寸海い
む呉人間の初めよく寸海い
祈りなども神仏あつ
くうちなり給へ
一人の妻と成ては夫を敬ひ
得べき妻の道慎むべき

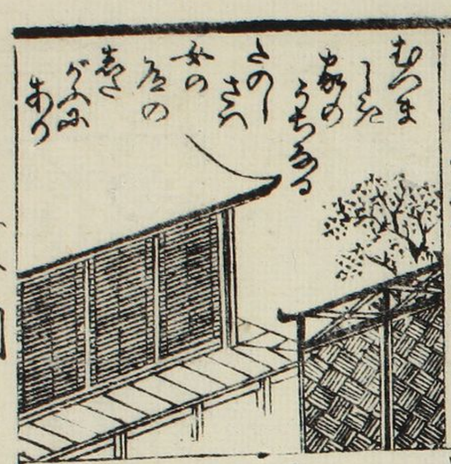


れば和順する方の道にて
妻となるべき家職の業を
も能のうち沢よまさひ用
ひく書ることなれ
一若元湯の上の妻は女遊
び不祥ふ男出入打ふる
初後一夫婦べき男女の湯
を共にいる用あり迎も
若元男ふ教ふ色ふ
一夫婦は衣裳の深いろ
揚粧なども同ふ
は元と家職との様粧て
深げ為ふ給れて清元紙

一我郷の聟の方の私一生の
さの聟おを次にすべうこと
正月黄色をもつて先支芳
を初めて次の家聟の方を
勢丈一生の体さぐる事
物の方へも行べうこと
能聞すべうこと
一女は俺聟の家をば
男出の迹を探ぬるはづ聟
よりも男出を大切にかんじ
考べし惜しく後に我

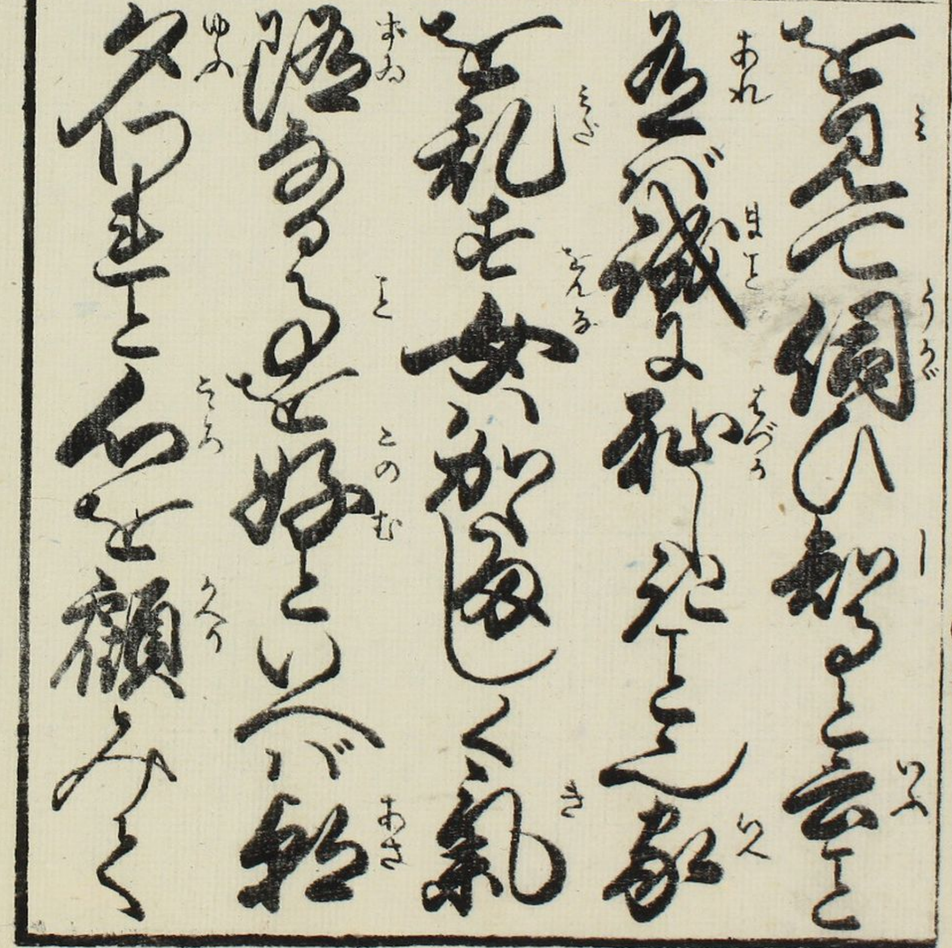
人ごとに優く素直なる
服装や姿の振初めも
聟ぐつく職さ友を
うらべうこと水方者
の長が道ひ人を名

聟の家に行るも揃ふべし
もつて他の聟は方につくを
考へて書問をなす一又
家聟にのふるを後に
嫌ふべうこと
一仲人は方の
と自幸吳を思へて勧ること

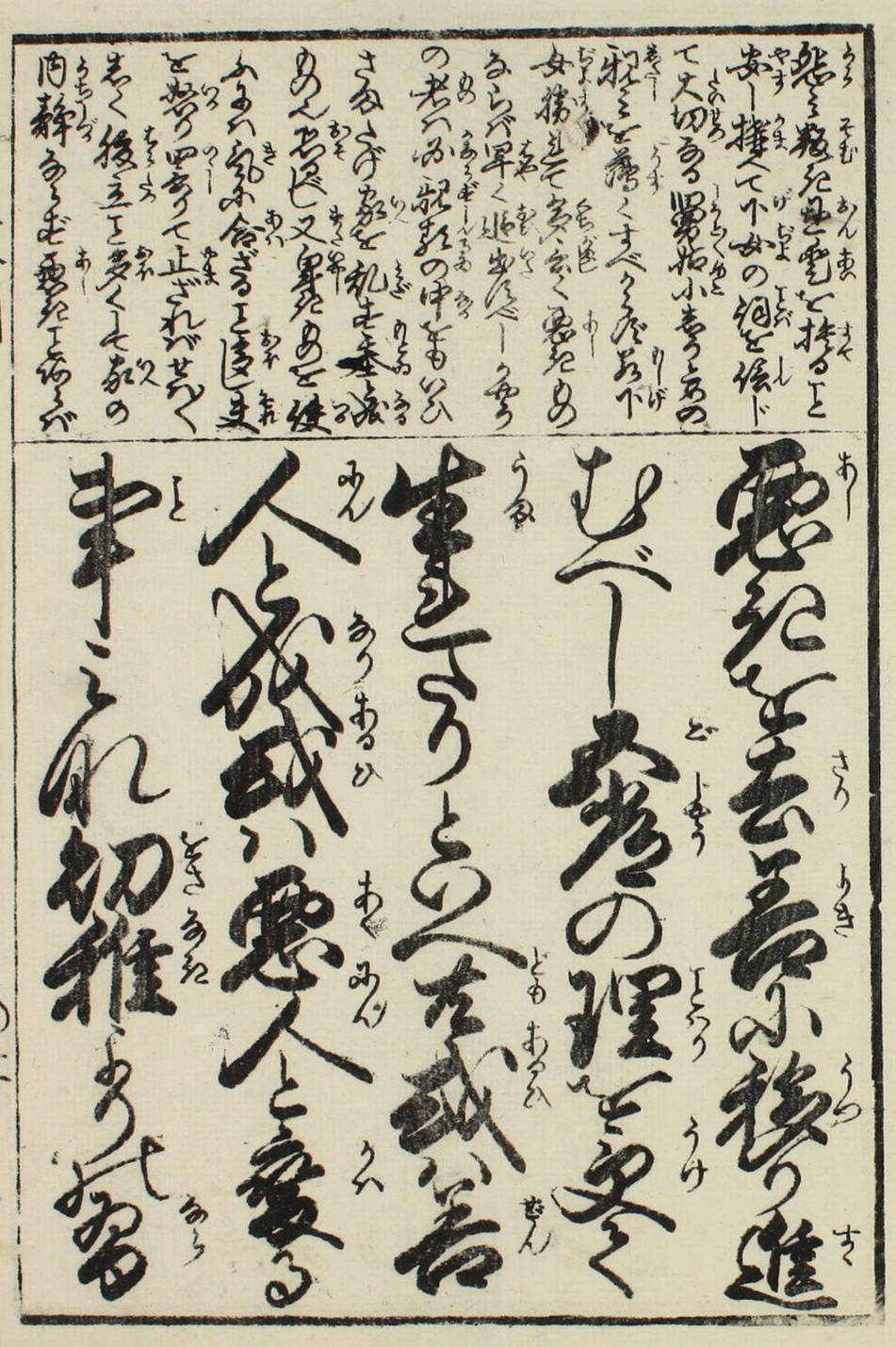


悪の友になること言と実
なるは板を結家を
治る女は子を好
中傷る人は善を初
めべこと聟は

女は化粧し男は立ちかふ衣を
強盗を捕へて仕ふ衣を
拳を振り立て肩を洗ふ洗ふ
男の問ふなら振ふ外へ出べくば
一ツ女を仕ふ人を尋ねどもの
ぐひ合ふ義(合)尋ねて者
あるべく人好くめ云ことさぐ色
是は男振ふ拍子ぞ我ふ
合ねとの是べ振ふ後ろ安せ
て手を新て主の為とぶう
縁人り者あるべく是を
縁ドてはは振を出来安一元
来是のあい活化人合ニハ



能を敷元是を拍ると
安一撫て下女の袖を縁ド
て大切なる男振ふ者ると
振ふ者ふ者ふ振ふ進
女猶是を者ふ者ふ
あらば早く進ぶ一
の者ふ拍子の中も
さあ子を私は是
あるべき民又是あ後
ふあ人ふ合ざると是
を為り四ツ立て止ざれば
者く後ニと者くて教の
内辞ふ者ふ是ふ



ひよう遠し男子ハ師
を取て道を修る事を専らとし
むかしも有との左女とし
て[illegible]学ぶ事の博く[illegible]
故に女ハ法を守事を知べし

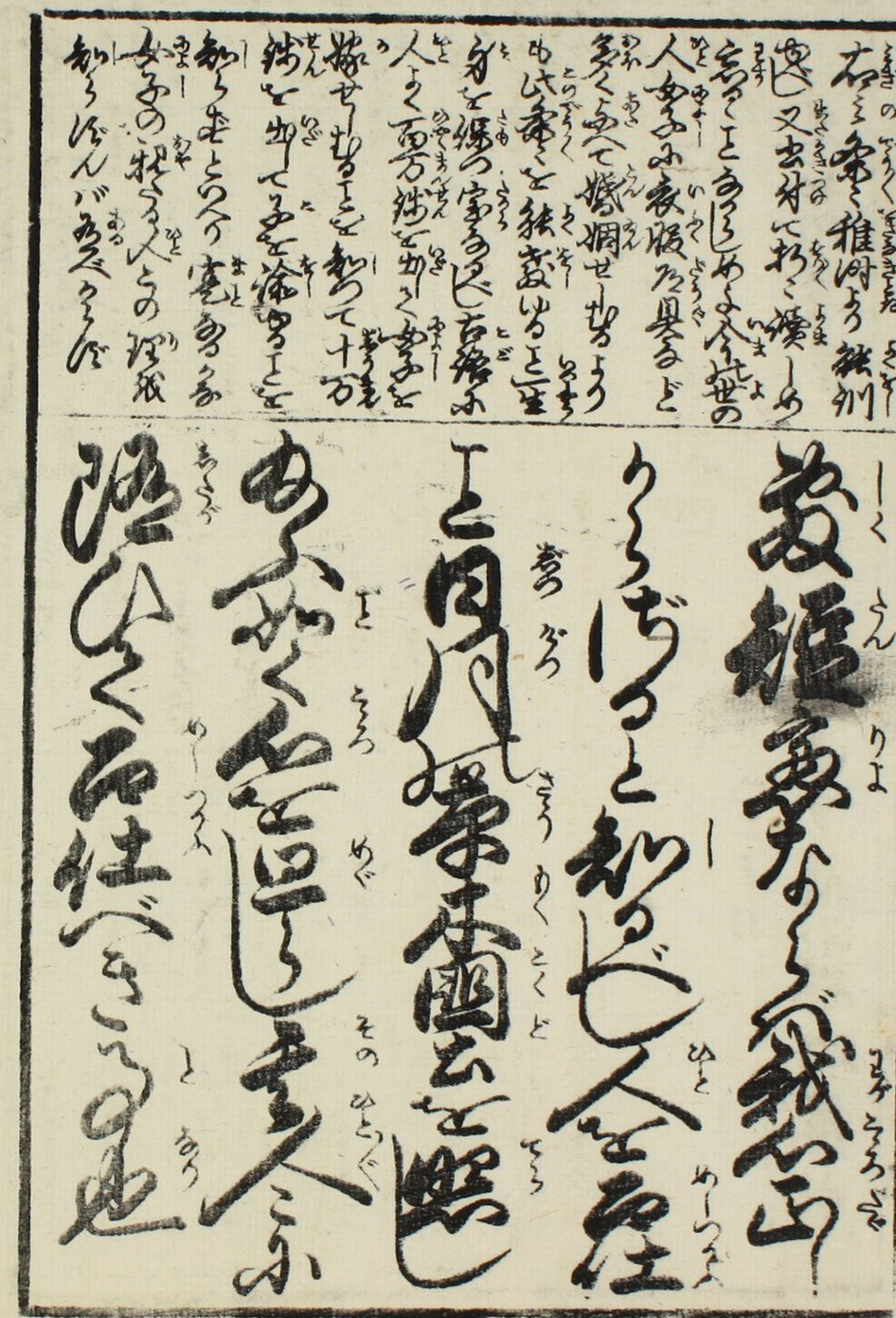
かく[illegible]を教ゆるの
織[illegible]紡績裁縫
なく[illegible]家事[illegible]
男[illegible]ハ父母
の許に帰るハ将のうち

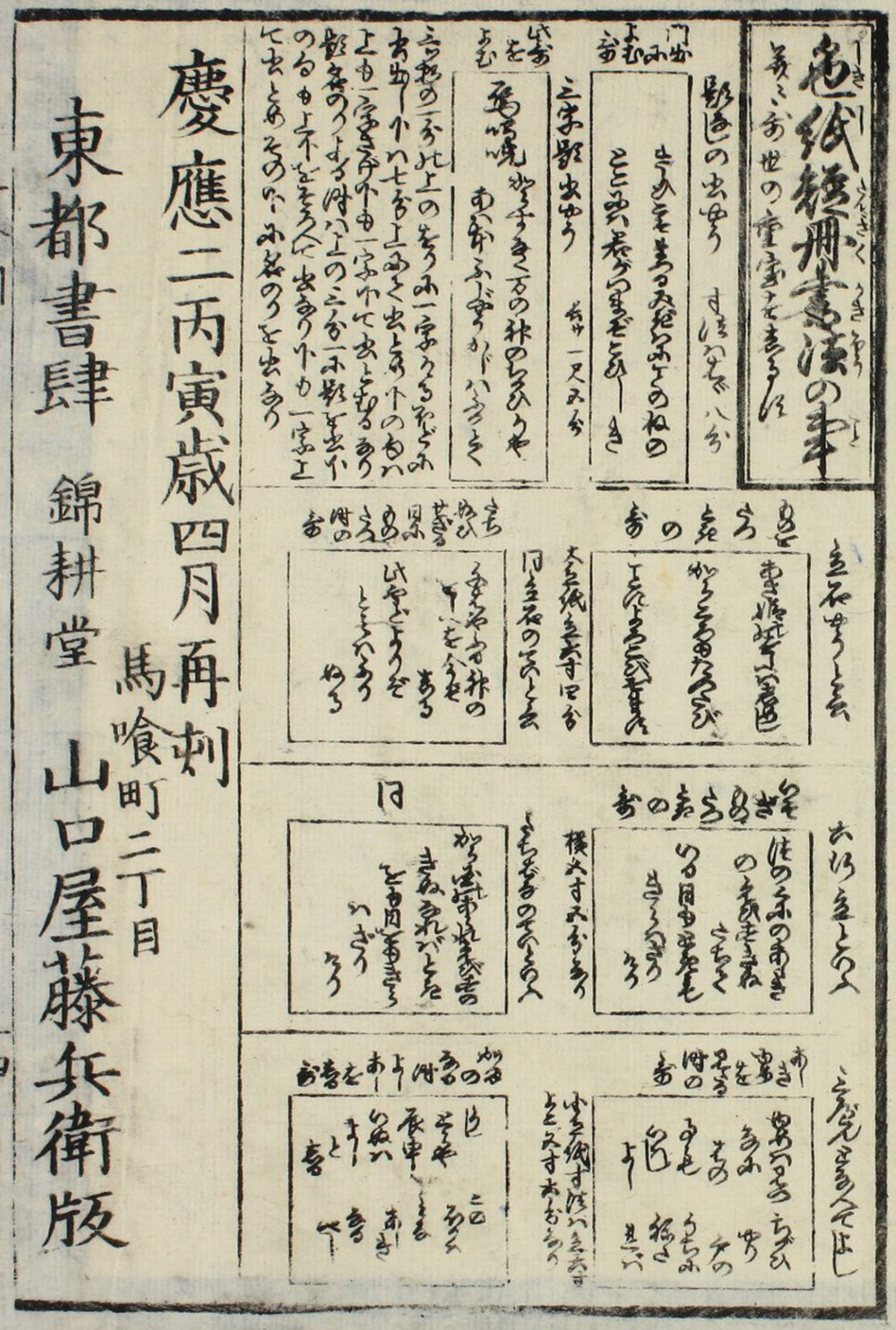
人の儀をさまたをと妻はまた我
女はづかしく成べしとても
和らぎ様も亡人を恋慕
呪詛するひと人を恨を悩を
我身独身なんと思ひ人を悩
を深れて皆我身の仇と成
とて和らぎ様を恨ふ淵
しくるを言れば雲ふ淵
生を捨ん世界一切無常なる
ふ物のも我身を強りて
女ふ恨べーなの法ふ女
ふを養ぶ二日家の小姓外
志むしとの今晩も男ハ女ふ

成ば善り生を無ら物
一世面ふ面影勝繁盛
上糸のみ乱し無成
様人とする人婦人老素
虫食るなく食く

恋ふ生死ら物成べ
富るとの生知ふ人ふ孫
思れ恋慕我を恋
和らん言ぶ文ふ稲
我ふ生とも忙

恋ふ女ハ地ふ夢なふ男の
上ふ対ても文を先を我身
を捨ふ我ふ生るとふ好
とふとも捨るふ女くまさ
恋ふとも女ふ云ふとも
婦恋とふくふを改め重
れて人ふ恋ふるふ我
身を捨ふ又人ふ強られても
腹を懐るとふくよく捨べく
和らんとふ文ふ稲
くふ和ふ文婦の中自ら
和らぎ様ふ文ふ速を
てふのうち稲ふべー





慶應二丙寅歲四月再刻

東都書肆　錦耕堂　馬喰町二丁目　山口屋藤兵衛版